

会報と研究交流会の役割

本会の主たる活動に、年二回の本会報発行と各研究室が持ち回りで実施する年一度の陽電子科学研究交流会（以下、交流会）があります。両者には陽電子研究者のすそ野を広げるという共通した位置づけがあります。

会報は今回で第6号となり、発刊以来11編の入門講座が掲載されました。編集委員会では、陽電子消滅法に関する様々な項目を列挙し、各項目で執筆者を選定し、依頼しています。内容は大学学部を卒業した初学者が理解できることを前提にしていますが、“難易度が高く入門講座になっていない”、“入門講座を読むための入門講座が必要”などといったご意見が寄せられています。編集過程では査読を該当分野の専門家に依頼します。査読者からは、読者に誤解を与えないようにするための意見が多く、記事の完成度は高くなります。しかし、専門でない研究者にとっては、“学術的正確さ”ゆえ、“わかりやすさ”という観点からは必ずしも満足をいただけないかもしれません。今後、専門家以外の方にも査読をお願いし、“わかりやすさ”にも重点をおきたいと思います。昨年9月に武漢で行われた第17回陽電子消滅国際会議(ICPA-17)で中国の学生が中国語で書かれた陽電子消滅法の教科書をもっているのを発見しました。教科書は分野に関わらず研究者のすそ野を広げることに欠かせないツールです。会報の入門講座をベースにして教科書が発刊できればと思います。入門講座として取り上げてほしい項目がございましたら、ぜひ編集委員会までご連絡ください。



日本陽電子科学会 副会長
会報編集委員長
SLOPOS14 組織委員長
藤浪 真紀

Masanori FUJINAMI
(千葉大院工)

一方、交流会も昨年で8回目となりました。例年、二泊三日の合宿形式で行われ、30名から40名の参加者があり、陽電子の基礎講義と最新の研究紹介が概ね2:1の比率からなる約10テーマの講義で構成されています。私の研究室の学生も毎回参加していますが、その講義内容は学部学生にはまだまだ難しいようです。昨年の仙台秋保温泉での交流会では、従来の講義のみの形式から、事前質問票を活用した形式を取り入れ、内容をより理解できるよう工夫されていました。交流会は、陽電子というキーワードで様々な観点からの講義を基礎から聴講できるよい機会であり、講演者にとっても大変勉強になります。陽電子研究の大きな広がりを感じられるのが交流会です。

これら二つの活動には多くの会員が関わっています。入門講座記事では、著者、査読者(二名)、編集担当者・副委員長・委員長、刊行担当者・委員長と少なくとも7名が関与しています。交流会は講演者だけでも平均9名、そして幹事研究室の皆さんです。これだけのマンパワーをかけて、陽電子科学の会報発行および交流会開催が可能なのは日本だけです。これらの活動が、日本における陽電子研究の持続的発展を支えています。今後とも、会報・交流会など本会活動に会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

ところで、本年5月22日から27日まで島根県松江市で第14回低速陽電子国際ワークショップ(SLOPOS14)を開催いたします。陽電子ビームのみならず、広く陽電子が関わる研究を発表・討論し、研究交流の場としてください。また、ソーシャルプログラムでは、国宝松江城、たたら製鉄、出雲大社を訪れ、石見神楽を觀賞し、日本海の幸をご堪能いただければ幸いです。多くの皆様の参加をお待ちしております。